

春の彼岸によせて

令和七年三月 大乘寺 長老 岡 光俊

今年は、二月に入り寒波が襲来し、観測史上一番の大雪となりました。

今、皆さまにとって、気になることはなんでしょうか。

ロシアによるウクライナ侵攻の終結、人工知能開発競争、アメリカ経済危機建て直しのための政界汚職、税金不適切使用の実態解明、韓国政界の混乱と学生運動の着地点等でしょうか。

世界中の国々で、また我が国でも当たり前のように不正、汚職が行われています。

そのようななかでも、科学分野は加速度的に進化し続けていますが、人々の心は置き去りにされているようです。

自然の動きや流れは「見える化」、「言語化」は可能とされますが、人の心は同時に多くのことに向いているようで、お釈迦さまは、そのような心の動きを、

「心根は猿猴の如くにして、暫くも停まるときあることなし」と申され、人の心は、猿と同じで、ほんの一瞬たりとも停まっていることはない、説いておられます。

人類が持ち続けている争いの「元」は、動物として持っていた「本能」なのでしょう。

最初の人類といわれ、二足歩行を始めたと言われる「チャデンシス」から七百万年経った今も、争いの本能そのものは変わっていないということです。

争うことで平和は得られないことを人類に説き続けられて三千年、お釈迦さまの真意に気づく最後のチャンスとも思えます。

お釈迦さまがお伝えされたいことはただ一つ。

人類を救うことができるのは、人類自身でしかなし。  
いい換えれば、人類を滅ぼすのは、人類自身でしかなし。

お釋迦さまがなぜそのようなことを申されたのか。

人類はほかの生物と異なり、知能を持つことで大きく進化をします。その進化の過程で慈悲の心、忍辱の心、随喜の心を習得し続ければ、生きとし生けるものすべてに優しさを向ける心となりますが、争いの心、そのままに進化を続けければ、壮大な争いとなり、お互いが滅びていくことを予見されていたからです。

お釋迦さまは、人類を救う方法をお経に込めて下さっています。それはどれも、ほかとの争いの無意味さを説き、ほかを尊ぶことで和の心が豊かに清らかになり、争いの心は薄れていくと説いておられます。

皆さまが、しっかりと自らの心の動きを見つめ、和の心の成長がなければ、尊い命を奪い合う愚かな争いを繰り返すことになります。

このような愚かなことをいつまで続けるのでしよう。  
いや、いつまで続けられると思っっているのでしょうか。

春の彼岸、厳しい環境から解放され、暖かい希望に満ちた春。心が明るく希望が持てる社会にするために、まずは自らの心を省みて、争いの元を洗い流す参拝として頂ければと思います。

合掌